

# 外国人と交流 地域の力に

「陳さん、久しぶり」  
陳さんは平成9（1997）年に大学で学んだ

「元気にしてたかい」。  
松本市並柳、神田境の弘法山古墳で4月下旬、清掃活動があった。参加した台湾出身の陳瑛清さん（48）＝松本市並柳2＝には、地域の人から次々と声が掛かる。芝桜の間にある大量の落ち葉を拾っていたが、参加した人と「きりがいいね」と笑い合った。

## 未来をひらく

97）年に大学で学んだ  
め来日し、卒業後は富士電機に就職した。19年に松本市へ移り、今は2児の父親で、地域の活動やイベントの担い手としても頼りにされている。  
30年には並柳神明宮奉納神輿会の責任者である「頭」を務めた。会に関わるきっかけは、会社の同僚に誘われ「面白そう」と思ったからだが、外国出身の人が日本人の住民と知り合う機会は少ないと感じる。「もっと触れ合うイベントがあれば、話す中で『何かやってみたい』という思いも

### ⑦ 多文化共生を進めよう

出るかも」と語る。

◆ ◆  
県内の外国人住民数は令和2年12月末は3万5777人だった。新型コロナウイルスの影響もあり6年ぶりに減少したものの、近年は増加傾向にあった。松本市の第2次多文化共生推進プランは基本理念の一つとして、言語や文化などが多様であることをプラスに変え、多様性を「活力に変える」と掲げた。NPO法人中信多文化共生ネットワークの日本語教育アドバイザー・佐藤佳子さんは「多文化共生は、困っている人（外国人住民）

を支援するという一方的なものではなく、力を発揮し、地域で活躍してもらうためのサポートが重要」と指摘する。

◆ ◆ ◆ ◆  
同じ社会の構成員として、異なる言語や文化を積極的に学ぼうとする人もいる。国際文化交流に

取り組むNPO法人民間長野国際協力センターが松本市などで行う韓国語講座は、毎年多くの日本人住民が受講する。食文化を学ぶ機会もある。  
受講する吉岡公男さん（72）＝同市今井＝は「初めて韓国に行った時、言葉を聞いて『おっかない』と思った」と振り返る。その後、韓国人には「日本語も最初はけんかをしているように感じた」と言われたといい、吉岡さんは「知らない」と怖いと思ってしまいがちなんだ」と実感した。言葉や文化を知ることとは互いを理解する一歩と捉え、今後も楽しみながら学びを続けるつもりだ。（浅井文人）



弘法山古墳周辺で地域の人がたたく清掃に励む陳さん（中央）

#### みんなの一言

- ・出るくいを打たない。県外から松本に移住してきた人は、松本は閉鎖的で商売がしにくい、新しい人・ものを受け入れてくれないと言っている。  
（松本市鎌田1、パート女性、43歳）
  - ・もっと多様性、違いを認め合える社会にする。  
（松本市元町1、自営業女性、41歳）
- ※市民タイムスのHPなどのアンケートより



《第1部》ふるさと×アップデート